

『大物見せれば女が抱ける』

ニートが妖精に貰ったのは、巨根ならモテる催眠力！
最低人生への復讐が始まった！
狙うは人妻幼馴染、そして憧れのアイドル！

【巨根催眠】

うさぎロボ 著

1章 一度でいいからセックスしたい

コンビニの袋を提げて、これといった特徴がない小太りの男が住宅街を歩く。

——今日で三十歳か。

何もない人生だった。

元々人付き合いが上手くはなく、ついに中学で不登校になった。

周りの連中が楽しそうにしているのを、一人で見ているのが辛かった。

数年して気づく。

社会の中に入っていくには、学校からの道しかほとんどない事に。

気づいたときには遅く、ニート暮らしが始まっていた。

両親共に公務員で一人っ子。

しばらくはなんとでもなるだろうが、ますます潰しが利かなくなったころ、両親がいなくなることはわかる。

そのとき、どうすればいいのか。

何も道などない。

自分のような人間は大勢いるだろうに、社会は何一つ手を差し伸べない。

過剰な手助けや支援を受けている人間もいる一方でのことだ。

なんとなく納得がいかない。

が、どうしようもない。

わけのわからない市民運動の類に参加出来るほど純粋でもない。

仮に「悪い法案」などを止めた所で、誰かが月三十万ぐらいで雇ってくれるというのか。

何もない。

結局、上のほうの連中だけだ、どこへ行ってもいい目を見るのは。

「伝太くん」

女。振り返る伝太。

「ああ、麗ちゃん。帰ってきてたんだ」

「子供も夏休みだからね」

やっと小学生ぐらいの女の子二人を連れた女。

そういう年の人間を見るのが一番伝太には辛い。

自分も「普通に」生きていれば、子供ぐらいいるはずの年齢だと思わされる。

自分の人生が「普通以下」だと思い知らされる。

その女、麗美は幼馴染だった。

家が近く、昔はよく遊んだものだ。

だが、中学で不登校になってから関係が切れ、そのまま。

相手は二十少しで結婚し、今子供が二人というわけだ。

——愛想良く話しかけてくるが、結婚式にも呼ばなかったんだよな……

まあそんなものだろう、と思う。

今の人間関係からは離れているから呼ばなかっただけで、別に伝太がどうという話ではないと思っていた。

むしろ、他の同級生連中より好意的に思える。

始めは「愛想がいい」表情だったのが、話している間に親しげに感じられた。

——昔はこの子が好きだったんだ。

そんなことを思い出す、少し幸せな時間。

普通に自分が学校に行っていれば、目の前の子供は自分の子だったかもしれない、などと思う。

伝太と結婚していればその子らは生まれないことはもちろん伝太にもわかる、ただの妄想だ。

しばらく適当に話して、反対方向に歩き出す。

曲がり角を曲がり、少しいく。

と、何か道に落ちている。

子供の玩具だ。

麗美の子供のものと早合点はしない。

しかし、姉の方が持っていたものと同じだと気づく。妹のほうは持っていなかった。

もしかしたら、と思って拾い、踵を返す。

曲がり角を曲がる。

麗美の背中。スマホで何か話していた。

「れ……」

「そうそう、デブタよ！ 実家に近いから会っちゃった！」

挙げかけた手を下げる。

「麗ちゃんだって、いつまで子供のつもりなのかな？ まあニートみたいだから、大人になれないのかもしれないわね。でも旦那に聞かれたらちょっとまずいでしょ？ まったく仕方ないわねああいうのは」

曲がり角の後ろに下がる。

とても顔を出せる状況ではない。

「まあ、あんなのと関係あるとは思われないから大丈夫だけどね。っていうか、あいつまだ童貞……というより、一生童貞じゃない？」

大笑いする。

玩具を道において、踵を返す。

——まあ、こんなもんだよな。なんでもない。

道がグニャグニャになっている。

早く修理してもらいたいものだ、と思いながら家に帰る伝太。

両親とも、役所にいて留守だ。

二階の自分の部屋に行く。

もう眠る。弁当を買ってきたが、食べる気力はなかった。

麗美の顔を思い出す。

親しげに話した顔と、その後スマホで誰かと話していた後姿。

どういう顔をしていたのか。

想像もつかない。

ニートとして社会から隔絶された人生を送る伝太は、子供のころから本質的に変わっていない。

それは汚れていないといえるのかもしれないが、そういう価値を認めてくれる人間などこの世に一人もいないのかもしれない。

「おお、若いね」

チラ、と声のほうを向く伝太。

——幻聴か？

積み上げたゲームの箱。

ゲームをする速度を、ゲームを買う速度が上回ったのはいつだったか。

いいゲームは長く遊んでしまう。

今やっているのは結局、十年前の外国製のシュミレーションゲームだった。

やったことがないゲームの箱の上に、何か立っている。

小人。

ちょうどフィギアによくある大きさぐらいの小人。

というか、周りの美少女フィギアと同じぐらいの大きさだ。二十センチないぐらい。

幻覚だ。

幻覚だ。
小人というより妖精か。

子供っぽさをアピールする
ような袖の長いパーカーの
銀髪ツインテールの女。

背中には透明の羽。

虫と言うより
クリスタルめいた光沢。

それを見て、伝太は
一つ面白い台詞を
思いついた。



小人というより妖精か。

子供っぽさをアピールするような袖の長いパーカーの銀髪ツインテールの女。

背中には透明の羽。虫と言うよりクリスタルめいた光沢。

それを見て、伝太は一つ面白い台詞を思いついた。

魂使えるか、という質問だ。

とあるゲームを知らないと意味不明だが、そういうのを聞いたがるのがオタクの習性と言えた。

「魂っ」

「魂はつかえないよ」

ギョッとなる。

が、幻覚なら自分が言いたいことぐらいわかるだろうと思いなおす伝太。

「っていうか「魂使える」って普通聞く？」

「妖精なら、精神コマンド使えるだろ」

昔やったゲーム。

友人から借りた。

いろんなロボットアニメのキャラが総出演という奴。

パイロットが「根性」やら「必中」といった能力を使い、強力な攻撃を出すシステムだった。

その能力の最高クラスのものが「魂」と呼ばれる奴で、伝太は結局それを使ったことはなかった。

そのゲームに妖精が出てきて、パイロットと一緒にロボットに乗り込んで能力を使ってくれるのだ。

妖精がいるパイロットはかなり有利ということだ。

「妖精なら、何か力があるのか？」

「一つ願いをかなえるよ」

「じゃあ願いを増やしてくれ」

「もちろんダメだよ。一個だけ」

「っていうか、なんで願いをかなえてくれる？」

ベッドに座る。

幻覚と話すなど、いよいよ終わってきたと思う。

麗美の電話を聞いてしまったのが、思った以上のダメージだったか。

——あいつがあんなこと……信じられないがそんなものか。

なんでも「そんなもの」で諦めねばならない人生を送っていた。

ため息をつきつつ、ズボンを下ろす。

クズ同然の能力しかない、**外れキャラ**の伝太だが、唯一他人より勝っている部分があった。

「うわっ、超大きいじゃん」

妖精にもわかるのか。いや、幻覚だから望む反応をしているだけか。

ベッドにベタッと垂れ下がる一物は余裕で二十センチを越えていた。

体調によって萎えた状態の長さは上下するが、立った状態は一定だ。

立てば三十二センチ、かなり大きい巨根でも横に伝太が立てば並み以下に見えるだろう。

「こんな大物持ちが、六十歳になっても童貞とはね」

ギョ、と肉玉が空気に握り潰される。

この時代、肉玉ぐらい潰れてもナノテクで一日で治るが、それで潰れていいと思う男はいないだろう。

少なくとも、自分のなら絶対に嫌だ。

肉玉のほうも鶏の玉子ぐらいだが、それが引き締まって腹にへばりつく。

六十歳童貞。

その言葉には、それだけの威力があった。

「そ、そんなことわからないだろ」

「私は三十年後から来たの。伝ちゃんはそのときにも童貞でした。というか、童貞だから私が伝ちゃんの所にいったんだけどね」

三十歳童貞なら、まだ笑える。

しかし「六十歳童貞」など**放送禁止用語**ではないか。

——冗談じゃない、それは冗談じゃないぞ。

中学でもしている連中はいるだろう。

遅れに遅れ、今三十になったとはいえ、あと三十年も今のままなどありえない。

「六十の伝ちゃんは、できるだけ過去に戻って、自分の人生をましなものにして欲しいと願ったの。願ったというか、できるだけ過去に権利を贈って欲しいってことね。それで、ここに私が来たの」

「どうせならもっと過去にならないのか？」

——って、幻覚相手に俺は何をいってるんだ？

「残念だけど、ここが限度。ここより過去に戻れば、完全に六十歳童貞の伝ちゃんとの繋がりがなくなる。仮に不登校になった時点で願いをかなえれば、もうその先の伝ちゃんはまったく別人だもんね。でも、ここからなら未来が変わっても問題ない。六十歳童貞の伝ちゃんにはならないわけだけど、可能性としてはある」

よく分からない話だ。

が、薄っすらとわからないでもない。

未来の伝太が過去に妖精を送る。過去が変われば未来が変わり、妖精を送ってこなくなる。

そういう単純なタイムパラドックスは目を瞑ってもらえるのだろう。

妖精を送る未来がなくなったから、妖精で変わった過去もなし……ということにはならないわけだ。

しかし、その「なくなった未来」がそもそもありえないほどに大きく過去が変われば流石に目を瞑ってもらえない。

よく分からないが、そんな所か。

「幻覚……一様聞くけど、かなえてくれるとしたら、どういう願いがあるんだ？」

「お金とかはやめた方がいいんじゃない？ だって使ったり、取られたら終わりだもん。人付き合い上手くして、っていうのもまずいね。未来の可能性そのものが変わりそうだし」

「それだと、ほとんどないんじゃないか？」

いいつつ、思い浮かぶ。

麗美の顔。

彼女が、自分を好きになるというのはどうだ。

「誰かが、俺を好きになる……ってのは出来るか？」

「出来るけど、いいの？ クソみたいじゃないそんなの」

「クソみたい？」

そこまでいわれる話か。

「いや、だってそうでしょ？ 伝ちゃんが顔がよくて金もってりゃ、大抵の女は股開くよ？ 「好き」とかそんな程度の話でしょ？」

「ん、ああ……」

——酷い価値観の妖精だな……

「でしょ？ それなら、そうできるポジションを得るのが得でしょうが」

「でも金持ちも、コミュ力も無理なんだろう？」

「こういうのはどう？」

妖精が羽ばたき、飛ぶ。

そしてベッドに降りて、手を伸ばす。

——あー、気分悪いわ。

ちょっとした林を取り込んだ自然の多い公園。

その一番外側、生垣に囲まれた普通の遊び場に三〇ほどの女と娘らしい二人の幼女。

スコップで砂を山にする子供。シャツがまくりあがってパンツが見えるのを戻してやる母親。

ニコニコしながらも、母親はあまり機嫌が良くはなかった。

——実家帰って早々あいつに会うなんて。

デブタこと伝太。

それは麗美にとって腹立たしい存在だった。

はるか下に見下しつつも、遠くに突き放せない。

懐かしい子供時代、親しくしていた相手なのだ。

楽しかった時代の思い出の多くが彼と結びついている。

そんな人間が、社会から脱落して生まれた家から一步もでられず、女も確保できずにただ生きている。

腹が立つ話だが、麗美も昔は伝太が好きだったのだ。

その思い出は、過去の自分を汚すような気さえしていた。

初恋の相手は「あんなの」だと、ほかならぬもう一人の自分がしつこく言ってくる気がするのだ。

——ああ、嫌々。親引越してくれないかな。っていうか、あいつがどっか行ってくれりゃ……

夫のことより、伝太のことばかり考えている。

それに気づくと、さらに腹も立つ。

ふと、尿意を感じる。

地元だし、多少無用心とも思うが、子供を置いて近くの公衆トイレに入る。

すぐだ、すぐ。

そう思って、そこを離れないようにいつて走る。

公衆トイレは、ぱっと見てそうだとわからないデザインだった。

周りの木々が影を作り、涼しい。

その木の陰に、人。

ギョッとなる。

いくつもの意味で。

一つは、その人影が伝太だと気づいたことで。

——こいつ、つけてきた？

そう思うと、鳥肌が立った。

別に何も出来ないはずだ、が、子供がいる。

——こういう劣った連中は子供に性欲を向けるから。大人に相手にされないからね。

そんなことを一瞬で考えた。

おどろいた理由のもう一つは、伝太の格好だ。

——ここで立ちション？ 信じられない。そこにトイレあるじゃないの。

横を向いて一物を出す幼馴染の姿に心底嫌悪感を覚える。

夫や、前に付き合った数人のを見慣れているが、伝太のモノなど見たくも無かった。

——これ以上私の記憶を汚さないでよ。

思いつつも、女の本能か、つい見てしまう。

ブラブラと、垂れ下がる一物。

垂れ下がり、垂れ下がり、ほぼ膝の間で揺れる一物。

「あっ」

胸がドキンと大きく鼓動する。一瞬頭の中に靄がかかり、すぐに晴れる。

そんな妙な感覚を味わう。そうしつつ、凝視していた。伝太の一物を。

——う、そお……子供の腕より大きい……

——う、そお……子供の腕より大きい……

ほかの男と比べようとは思わないほどの巨大すぎる肉根がほとんど誇張なく膝の間で揺れる。

——別に、男の価値はそれじゃないわよね。男は大きさに拘るみたいだけど。馬鹿よ。

目をそらす。が、そらせない。
「で、伝太くんまた会ったね」
——ちょ、何話かけてんのよ！
立ちション中に声かけられたら、相手もまずいでしょ！

顔が赤くなっていないかと心配しつつ、務めて平然と声をかける麗美。
一物のほうを見ていた伝太が顔を引きつらせて横を見る。
目を見開き、驚いたような顔を作る。
「え、あ、麗ちゃん。こ、これは中が故障中で……」

「ん？ ……あ、ああ！ ごめん、気づかなかった！

だって腕だと思ったし……」

——何いってんの私！
慌てて顔の前で手を振る麗美。



ほかの男と比べようとは思わないほどの巨大すぎる肉根がほとんど誇張なく膝の間で揺れる。

——別に、男の価値はそれじゃないわよね。男は大きさに拘るみたいだけど。馬鹿よ。

目をそらす。

が、そらせない。

何とかそらす。

だが、戻ってしまう。

「で、伝太くんまた会ったね」

——ちょ、何話かけてんのよ！ 立ちション中に声かけられたら、相手もまずいでしょ！

顔が赤くなっていないかと心配しつつ、務めて平然と声をかける麗美。

一物のほうを見ていた伝太が顔を引きつらせて横を見る。

目を見開き、驚いたような顔を作る。

「え、あ、麗ちゃん。こ、これは中が故障中で……」

「ん？ ……あ、ああ！ ごめん、気づかなかった！ だって腕だと思ったし……」

——何いってんの私！

慌てて顔の前で手を振る麗美。

——アレが腕だと思ったから立ちションじゃないと思いましたって、どういう理屈よ！？

顔が真っ赤になってしまうが、もう戻らない。

余計に動揺し、空が飛べそうなほど手を振る。

「いやいやいやいや！ 子供の腕ぐらいついでこと！ 別に大人の腕とか大ききなこと言ってるんじゃないくて」

「あ、わかってる。いや、わからないけど。今立ちションに気づいたことはわかる」

「わかってくれて嬉しいわ。だって立ってそんなこと……ここでしてるなんて思わないし……だってトイレそこだもんね。あ、でも故障してるんだって？ それじゃ仕方ないよね」

「そういつてもらえと助かるよ。あ、子供は？」

「そっちだから大丈夫。見られちゃまずいもんね。パパより目茶目茶おチ○ポ大きい人と会ってたよ、なんていわれたら離婚の理由になっちゃうわ。パパの十本分のボリュームだなんて……」

「そ、そう？」

「あ、普通うちの人の。でも、伝太くんのおチンチ○大きすぎるから」

話しながら、ジッとそれを見ていた。

伝太の顔をチラッと見るようなこともまったく欠片もなく、一物に話しかけるように見続けていた。

——大きいわ。そういえば、子供のときからデブタの大きいとか周りの男子に言われてたっけ……どうでもいいことだから忘れてたわ。でも、何でもどうでもいいなんて？

唾を飲む。

大きい。

大きい男性器。

巨大な一物。

ブラブラと、先っぽも丸出しで薬のビンぐらいのボリュームだ。

茎もマラソンのバトンどころではない。

膝を締める麗美。

——す、凄いわ。デブタのアソコこんな……化け物みたいに大きい。男の価値は、ペ○スのサイズなんだから……デブタは超いい男ってことじゃないの。

そう思うと、先ほど砂場で考えていたことが思い出される。

別に、それに矛盾は感じなかった。

ただ、変わった。

——チンチ○がこうであるとわかった以上、デブタの男としての価値は私の中では跳ね上がったわ。もちろん夫なんかぶっちぎって一位に。いや、まああの人も二位だし、大事な人ではあるけどね。でも、あの超チ○ポに太刀打ちは出来ないわ。

そうなると、過去の自分の感情も淡い思い出に変わる。

甘い息を吐く麗美。その目は伝太の股間に注がれていた。

初恋を思い出してムードある表情をする大人の女が、一秒も肉根から目を放さないというのは結構シュールな光景だろう。

「覚えてる？ 一緒にこの公園で遊んだね」

ニコッと、子供時代に戻ったような笑みを浮かべつつ伝太の一物を凝視する麗美。

「そうだったね」

——やべえよ……なんだあの視線は。チ○コしか見てねえじゃん。チ○コに話してる？

「上手くいったね」

妖精。

風に乗って飛び出し、伝太の横でホバリングする。

「願い、叶えてよかったでしょ？」

「ああ、そうみたいだな」

「え？」

麗美が驚いて伝太の股間を見る。

——本当に大きいおチンチ〇ね。デブオタニートで未来無しでも、ここまで巨根なら文句はないわ。

徹頭徹尾無茶苦茶なことを考える麗美。

もちろん、普通の状態ではない。

伝太の願いによって、考え方が変えられていた。

といっても、麗美を変えたというのとは少し違う。

変えたのは、伝太の一物だ。

それを見た女が、「巨根こそ最高で、大きいのを入れられるのが最高に気持ちいい」と考えたり感じるような催眠状態になる魔力を一物に宿す……それが伝太の願いだった。

伝太のというか、妖精がそれがいいというので願ってみた。

流石のボンクラニートで、人生最大のチャンスでも他人の軽いアドバイスにあっさり乗っかったのだった。

まあ、半ば信じていなかったというのもあるが。

ジロジロと、人妻の凶太さか、伝太の一物をテレビ画面のように見続ける麗美。

「伝太くん、最近何してるの？」

「いいフリーのゲーム開発ソフトがあったから、フリーゲーム作ってるんだ」

「へえ、凄いね」

どんな返事だろうが大体「へえ、凄いね」と返す気だったのだろうな、と気づくほどの経験は伝太にはなかった。

そもそも、大人なのだから遊びの話ではなく仕事のことを聞いているのだが、働いたことがない伝太にその感覚はなかった。

それは、麗美に配慮がないだろう。

彼女も伝太が働いていないことは大体知っているのだから。

しかし大人同士だから、つい常識的に仕事のことを聞いてしまった。

伝太が、褒められて気を良くして話し続ける。

「いや、確かに上級者向けといわれてるツールなんだけど。でも簡単だよやって見たら」

「そうなんだ、さすが伝太くんね。前からゲーム好きだったもんね」

「まあね」

っていうかチ〇コ隠せよ、と横をホバリングする妖精は思うが、まあいわない。

「これでわかったでしょ？ 願いどおり、あなたのチンチ〇は催眠チ〇ポとなった。見た女は巨根最高、巨根入れられたら気持ちいい、という人間に変わる」

その上、妖精は試したい幼馴染が今どこにいるか探り、こういう形で出会うのはどうかと知恵まで出した。

至れり尽くせりといえるだろう。

知り合いに偶然一物を見られる事など、中々起こり得ないことなのだから裏があるのも当然だ。

先ほどの伝太の驚いた顔も、演技だったわけだ。

まあ、そんな事はどうでもいい話だろう。

妖精が伝太には見えるが他人には見えない、ということもまあどうでもいい話。

「そうだ、さっき聞き忘れたんだけど。電話番号教えてくれる？」

聞き忘れた、とは上手く言うものだ。

伝太にたずねられても絶対に教えないつもりだったくせに、忘れたもない。

が、そこには気づかない伝太は流石のボンクラニートだった。

忘れてたなんてよく言う、というような雑念は一切なしに、普通に対応する。

「ん……あ」

伝太とて携帯ぐらい一様もってはいるが、掛けて来る人間もいないのでわりと家に置きっぱなしにすることが多い。

「ごめん、家においでるわ」

その答えに、麗美は俯く。

「そうだよね、私と伝太くんのおチ○ポじゃ釣り合わないよね」

「え？」

「……じゃなくて、私と伝太くんじゃ釣り合わないよね、だったわ」

妖精に視線を向ける伝太。

——いくら催眠チ○ポだったって……

「こりゃ効き過ぎだね！ 多分でかすぎるからだろうね！」

そういわれて悪い気はしない伝太。

——そうか、大きすぎるからなあ、俺のは。ふふふ。

「電話掛けて来られても迷惑だもんね？」

「いや、本当に忘れたんだけど」

「もちろん、疑ってないよ？ でも、忘れるわけないし」

「ないっていわれても……」

——疑ってるっていうかまったく信じてないよな。

「そうだ、持ってないか確かめてみなよ」

「え、そんな、疑ってるわけじゃ……でも、ちょっとだけ確かめようか」

よく分からないことをいって、ようやく一物を収納した伝太に近づく麗美。

「それじゃ、調べるよ？」

いって、ズボンの横を触る、ズボンの前を触る。

反対の横、ズボンの前。

ジャージの上着のポケット、ズボンの前。

反対のポケット、ズボンの前。

「本当に大きいね」

「えーっと」

「じゃなくて、本当に持ってないね、だったわ」

「これ催眠効いてるって問題か？」

携帯を探るといふ口実で散々股間を弄られ、何とか反応しないようにしつつ、つい口にする。

「でも、本当には言ってないのかな？」

「え、あっ」

グニグニ。

正面に立った麗美の手が伝太の太股に優しく触れ、股間にすり上がり揉む。

「ここなら何でも隠せるんじゃないのかなあ？ 伝太くんのおチ○ポの裏になら、ミサイルでも隠せそう」

「ちょ、まっ……そっちに子供いるんじゃ」

「大丈夫よ、影は一杯あるじゃない。高校時代私も使って……」

と、口を噤む。

伝太は高校に行っていないことを思い出したのだ。

麗美が彼氏と公園の影にいた時、伝太は今と変わらず自分の部屋にいたのだ。

「私、後悔してるのよ。うふ、形になってきた。嬉しい」

「や、やめ……」

下がろうとするが、後ろは木だった。

ズボンとパンツを引っ張られる。

ブン、と木刀が振りあがる。

「ああっ！ やっぱり伝太くんのおチ○ポ最高ね！ やあん、太すぎて握れない！ なんて立派なの！」

○ではなく、Cの形で手コキをする麗美。

究極の料理でも出されたように目を輝かせ、涎を垂らしてしゃがみ、一物を目の前にしている。

「ちょ、ちょっと待って、こんなところで……」

「みんなやってるよ」

「いや、俺は……はうっ」

「タマタマも大きい！ うふふ、懐かしいなあ、よく電気あんましたよね？」

「そうだったね」

「楽しかった」

「ん、まあ……でもちょっと、女の子に加減は難しかったのかな……」

「よく泣かせちゃったよね。でも、本当にそんなに痛かったの？」

頬を引きつらせる伝太。

今現在、肉玉を揉む女に言われたくない。

「昔も信用しなかったよね」

「だって大げさだもん、電気あんまぐらい。かなり手加減してたしさ。私ならもっと強力にされても平気だよ？」

「そりゃ玉が無いから……はう」

肉玉を握り潰される。

グニュグニュと、さすが人妻というか、絶妙な力加減で握ってくる。

爪先立ちの伝太。それを見ながら、まさに満面の笑みの麗美。

「玉無しって悪口は女性蔑視じゃないかな？」

「い、いってない」

「そう？」

首をかしげる。いたずらっぽく笑う。

——こういうの、なんかいいわ。旦那も、昔の彼氏もこんなことさせてくれなかったもんね。キンちゃん握っていいのはフェラの補助技としてだけで……こういう風に握らせてくれたら、なんか、相手を全部所有して、支配してるみたいで凄く心が満たされる感じ。

横を見る麗美。

木の多く立っている方向。

高低差もあり、低い木も生えていて周りから隔絶された一角。

「私、後悔してるって言ったよね？」

「いったっけ？ 何を？」

「初めての相手、伝太くんじゃなかったこと」

伝太の一物を見る前までは逆だった。

後数年親しい状態が続いていれば、多分していた。

その場合の後悔はハラワタを焼かれるような強いものだったに違いないと。

そうならなかったことにほっと胸を撫で下ろしていた。

それが今は、まったく逆転していた。

今現在結婚した相手が誰だろうが、誰の子を生んでいようが、初めて受け入れたのが伝太の巨肉根ならどれだけいい思い出だろうかと麗美は思っていた。

——ああ、処女をこれに捧げたかったわ。

伝太本体より、ほぼ男性器だけに魅せられている感じだが、まあそれらは不可分なのでいいだろう。

肉玉を握ったまま歩き出す麗美。

文字通り引っ張られ、周りが見えない木々の陰、窪地に入る伝太。

「伝太くん、三十歳のおばちゃんなんかいや？」

「そんな、同じ年じゃないか」

「よかった……ここまで来て逃げられちゃったら……」

目以外は笑う麗美。

「電気あんまだったよ。結構本気で！」

「そ、そう」

自分の選択は正しかったのか、とちよっと不安になる伝太。

だがそれも、目の前で麗美が服を脱いでいくまでのことだった。

「おお、オッパイ大きくなったね」

「伝太くんのチンチ〇ほどじゃないよ」

パンツ姿で、膝を突く。

若い頃から比べれば垂れつつある、しかし伝太は知りようもない巨乳を分け、巨大すぎる一物を挟む。

「あ、柔らかくて、温かい……」

「うひょう！ 先っぽ出てる！ 出てる分だけで、普通の人より大きいよ！」

「普通の人、か。あっ」

「旦那にもしたことない、フェラパイズりするね！」

頬が弛む伝太。弛みつつも、考えずにはられない。

——ほかの人に、旦那か……俺が一人ぼっちで、一回も他人と遊びにいかずに二十代終わったときにも、この子は誰かとやりまくってたんだな。

結婚し、子供を作って人生の一番楽しい時期を生きていた。

他人がそういう時期なのに、自分は何もない。虚しく辛い人生だった。

思えば不登校になったのも、周りが楽しそうなのに自分は疎外されている気がしたからだ。

結局、そういう形が自分の人生で、いつまでも変わらないのか、と思った。

——俺は、一度でいいからセックスしてみたいと思ってた。それを普通の連中は毎日やって当然で……

「あっ」

食いつくように肉根の先を咥える麗美。

——口いっぱいになっちゃう。凄いわ、咥えてるだけでいきそう……！

ゆっくり刺激に慣らしていくような余裕など見せず、いきなり舌をプロペラのように回転させる。

「あああっ、ちょおお」

——凄い反応いい！ 嬉しいわ。っていうか、やっぱり童貞なんじゃない？ 伝太くん！ 私は初めてじゃないけど、伝太くんの初めてもらえて涙出てくるわ……こんな大きいおチ○ポが始めてはいるのが私のおマ○コだなんて。

口を離し、茎から先端までベロベロと音を立てて舐め上げる。

同時に手も休まない。グイグイと左右から一物を押しつぶし、乳房を激しく震動させる。

「あああっ、やめっ……ぐああ」



——凄い反応いい！ 嬉しいわ。っていうか、
やっぱり童貞なんじゃない？ 伝太くん！
私は初めてじゃないけど、伝太くんの
初めてもらえて涙出てくるわ……
こんな大きいおチ○ポが
始めてはいるのが私のおマ○コだなんて。

口を離し、
茎から先端までペロペロと音を立てて舐め上げる。
同時に手も休まない。
グイグイと左右から一物を押しつぶし、
乳房を激しく震動させる。

「あああつ、やめつ……ぐああ」

腰を引こうとするが、当然のように後ろは木があって、
逃げ場はない。
膝立ちで、腰を前後にガクンガクンと振りまくる麗美。

——ああつ、嘘みたいに気持ちいいっ。
フェラしてるだけでいきそうなんて頭おかしくなりそう！
デッカイおチ○ポ最高にいいわ！

腰を引こうとするが、当然のように後ろは木があって、逃げ場はない。

膝立ちで、腰を前後にガクンガクンと振りまくる麗美。

——ああつ、嘘みたいに気持ちいいっ。フェラしてるだけでいきそうなんて頭おかしくなりそう！
デッカイおチ○ポ最高にいいわ！ ああつ、入れて、入れて、おチ○ポ入れて伝太くん！ 何してる
の、そろそろ「もういいよ」って言って、本番始めるタイミングじゃない！？

上目遣いで見る。

伝太は仰け反り、快楽に耐えてるだけだった。油断したら出てしまう、それも、最高に気持ちいい
形ではなく、フライングのような暴発として。童貞には、人妻のいきなりフルスロットルのフェラは
刺激が強すぎるのだ。

今も、チュバチュバと音を鳴らして先端部に食いついている。

「うわ、れ、麗美ちゃん……」

「あ、ごめん伝太くん、ちょっと興奮しすぎたみたいね」

口を離し、息をつく。

「ん、うん大丈夫」

「我慢強くてよかったわ。旦那ならもういっちゃってる」

——旦那より持ち上げたら……よし、嬉しそうね。やっぱりこれが「人妻」の美味しい所ね。実際
の所旦那ならあんだけ盛り上げたら次の段階にうつるんだけど……

童貞ならこのぐらいか、と思う麗美。

——それでも、デッカイチ○ポの分伝太くんの方が上だけどね。

巨大な催眠巨根を目の前にしていると、余計にそう思う。

一度みれば必要な強さの催眠はかかるが、見続ければさらに強くなるのは言うまでもない。

そこまで細かいことは知らない伝太。

だがなんとなく、彼女の極端な反応を見ているとそうではないかと思わないでもなかった。

——これだけ強い催眠力があれば、何でもできるんじゃないか？

たとえば、女社長を引っ掛けて重役にさせるとか。

憧れのアイドルを抱くことも簡単ではないだろうか。

——だとしたら、折角今まで童貞だったんだ、最初はピチピチの若いアイドルにしたほうが得じゃないか？ こんな三〇代のババアなんて……俺が何もない一章童貞かもしれない立場ならまだしも、これからはやりまくりだろ？

一度でいいからセックスしたい、一度でいいから。

そんなことを思っていた伝太は急速にいなくなりつつあった。

「麗ちゃん、ちょっといい？」

「ん……話はやりながらにしようよ」

服の上に寝転がる麗美。最後の下着が草の上に落ちる。

「ううっ」

麗美の手が、下着のあった場所を押さえる。

誘っているというしかない、股間を伝太のほうに向けて両膝を立て、上体をやや起こすポーズの麗美。

指がウネウネと動く。

「ここ、見たい？ 伝太くん」

「み、見たい」

三〇代はババア！ 童貞はアイドルに捧げたほうが得じゃん！

そんなことを考えていた伝太だが、目の前に秘密の花園が自分を待っているとなると、一瞬で理性が揺らぐ。

土下座っぽい体勢で麗美の股間に顔を近づける。

「うふ、そこまでいうなら……仕方ないね」

畏に嵌った蝶をみる蜘蛛のように笑うと、ゆっくり手を横に滑らせていく麗美。

体験版終わり

楽しんでいただけましたか？ この後麗美と本番、そして憧れのアイドルとの本番となります

よろしければ続きは製品版でお楽しみください